ちょこっと昔の一本松

一本松は他の地区とは違った開拓の歴史を持つ区だ。江戸時代末期の安政年間に、山形から来た人が東街道を歩いていて、東に大きな一本の老松を見た。あそこは高台かもしれないと思い行ってみるとやはりそうだった。開墾を願い出て許され、松の木の根元に家を建てて開墾を始めた。そして、山形時代から日蓮宗を信仰していて、清正公を祀った社を脇に建てた。

志を同じくする人が次々と移住してきて、区画整理をして今の集落の元になった。その功績で伊達家から山本の姓を賜ったという。

中学校前の通りに風よけにしたのか、太いポプラ並木があった。秋には幹に竹竿をわたして稲を干した。西に向かうその先は、馬車１台通るのがやっとの道で、 曲がりくねっていて、湿地のため馬車の車輪が土にめり込んだりした。また、中学校の正門の近くに広い学校田があり、田植え、稲刈りをさせられた。校舎を前方に新しく建てたとき、後ろにグラウンドを作ったので田はなくなった。私が小学校に入る前の頃は、今と違って岡吉田（吉田西部地区）からも中学校の生徒が通ってきた。

また、神社の祭りには出店もあり、とても賑やかだった。今は廃れた葬送の習わしがあって、亡くなる人があると、各家の道路に面した入口に小机を置き、香炉に線香をともして合掌して見送った。子ども心に皆にそうして送ってもらえるのは有難いものだと思った。

昔の景色で思い出すのは竹林だ。雪降りの日など竹林の中の道を歩くと、トンネルのようになって雪を被らなかった。また、川にはきれいな水が流れ、魚がいっぱいいて、夏にはその川で泳いだりもした。

昔はどこの家でも蚕を飼っていた。お金になるのはあれしかなかったからね。暮らしが豊かになったのは、畑にイチゴを作るようになってからで、一本松御殿なんて呼ばれるような立派な家が建てられるようになった。

震災後、復興住宅が建ち、田んぼの中に広い避難道路ができ、一本松区は大きく様相を変えた。 山本 清己さんにお話しを伺いました。（絵・文：佐々木）

編集長のつぶやき

今号は４年ぶりの開催となった「新春！おたのしみ演芸会」の写真紹介からのスタートです。「ようやく、やっと」といった感じでしょうか。これからも様々な活動が通常通りの規模と内容で開催できれば、と願うばかりです。紙面は連載の「防災豆知識」や地域に取材した「歴史探偵」「ちょこっと昔の…」という構成となりました。気がかりなのは、やはりあのコロナウイルスです。第１０波が立ち上がりつつもあると言われています。「換気・手洗い・マスク」で、ようやく巡ってきた日常を、何としても守りたいものです。皆さま、紙面の感想や地域の話題をお寄せください。お待ちしております。（佐々木）

次回は令和６年６月１日発行予定です

鳴り砂だより

吉田東部地区まちづくり協議会

広報誌 No.50

3月

発行日　令和６年３月 １日
編　集　吉田東部地区まちづくり協議会
住　所　亘理町吉田字大塚 185
電　話　0223-36-8831
ＦＡＸ　0223-36-8832
Ｅmail　wa.tukuri.yt@ia9.itkeeper.ne.jp
発行責任者　福本　眞

活動報告　新春!! おたのしみ演芸会（1/27）

４年ぶりに“復活”した「新春！おたのしみ演芸会」では、地域の方々と一緒に、とてもたのしい時間を過ごすことができました。これからも、地域の皆さまと共に、「みんなが主役」となれるような居心地の良い地域づくりを大切にして参ります。

～防災豆知識～「津波と避難」

令和６年能登半島地震（M7.6）（2024.1.1）では、土砂崩れあり、火災あり、鉄道や道路が各所で寸断し、１階部分がつぶれた家が軒並みあるなど**内陸直下型地震**の特徴がみられます。震源域（断層が滑った範囲）は、半島西端付近から佐渡島付近にまでの長さ約 150 ㎞に達するもので（図 1）、約半分は海域にあります。海域の浅い断層運動は海底の地殻変動を起こし、それが**津波**を起こしました。津波は早いところでは地震後１、２分で到達したという報道があります。震源域が海岸に接しているので、場所によっては津波発生とほとんど同時に海岸に達していたのです。震源が能登半島と言われながら、新潟県柏崎には津波が約 10 分後に到達していたことも、図１の震央分布をみれば納得です。

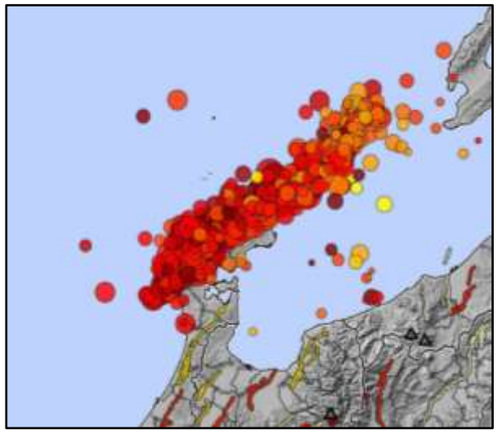


図１　2024 年 1 月 1 日 16 時から 24 時間の震央分布（気象庁 HP より）

東北地方太平洋側では、津波を伴うような大地震の震源域は日本海溝に近いところにあります。海岸から距離が遠いので、津波の到達までの時間は 30 分から１時間あります。

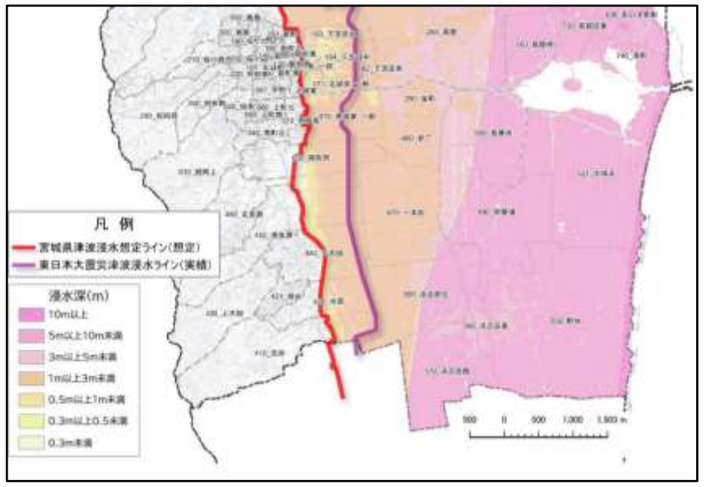


図２　津波浸水想定区域（令和４年５月宮城県発表津波浸水想定）

津波到達までの時間に命を守る行動、避難をしなければいけません。「亘理町津波避難計画」では津波に関する情報が発表された時、住民のとるべき避難行動の基準を決めています。図２はこの避難計画にある**津波浸水想定**の一部です。カラーは令和４年５月に宮城県が発表した予想浸水深で、潮汐や防潮堤の破堤など**最悪の条件下での予測値**です。紫の線は 3.11 の浸水限界、赤線は新しい想定の浸水限界で、最悪の場合は 3.11 より西、ほぼ亘理用水の位置まで到達する予測です。

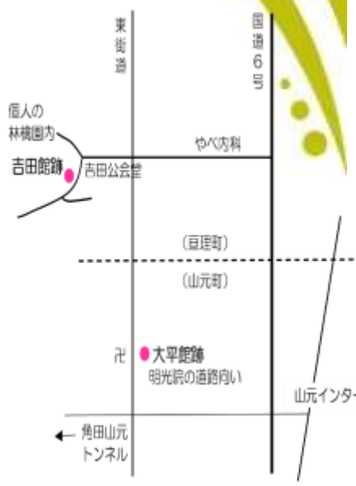
気象庁が発表する**大津波警報**（予想津波高 3m超）、**津波警報**（1m超～3m）、**津波注意報**（0.2m～1m）という３段階の津波情報に対し、町が発令する**避難指示**の対象区域が決められます。避難にあたっては、**水平避難、垂直避難**があります。基本的には徒歩や自動車によって水平避難し、浸水域の外側に移動しますが、自動車を利用できない場合は、近くの**緊急時一時避難場所**へ徒歩による垂直避難します。吉田地区では、緊急時一時避難場所として、長瀞小学校、吉田中学校、大谷地住宅、高速道路階段、防災公園（避難丘）があります。水平避難の目標は**指定避難場所**（吉田小学校、亘理中学校）です。交通渋滞を避けるため、ここで**大事なのは、指定避難場所への到達でなく、浸水域の外側への速やかな移動です**。（三品）

歴史探偵ごっこ

自分の住む「まち」を理解したくて、ものしり大学院やまちづくり協議会のイベントに参加してきた。その中で、吉田城（館）という吉田字北にある中世の城跡のあることを知った。図書館で調べたが、亘理町史のこの城の記述は少ししかなかった。今回、吉田西部地区まちづくり協議会の「史跡巡りウォーク」のコース中に吉田館跡が含まれていることを知り、探偵として現場確認のため参加した。

麓から登り始めると「曲輪（くるわ）」らしき広場があった。西側は亘理地塁山地が四方山へと連なっている。頂上からの眺望は素晴らしく、眼下に田畑が広がり、その先は太平洋へと続き、想像していた通りの山城ロケーションに感動した。だが、ここでも時代などが分かる物証はなかった。

そこで近くにある似たような城跡、大平館（山元町大平）の資料を山元町歴史民俗資料館で入手して、分かりやすく表にしてみた。



名称	環　境	時　代	城　主	規模・出土遺物等
吉田城(館)	東街道に近接し、西側は亘理地塁山地、東側は眼下に農地が広がり、その先が太平洋となることは共通。 なお大事な水は、池が多数あり、四方山の伏流水で対応か（？）	中世 (鎌倉から戦国時代)	不詳 相馬義胤の所領との説あり	38 間×38 間 曲輪（？）
		（㊫H23「城の基礎知識(仙臺領古城書上)」より）		
大平館		平安時代	不詳	ロクロ土師器出土
		（㊫H27「古代日理郡南部の状況」より）		
		乾元年間 (1302、03) （鎌倉時代）	大平長十郎(？) 文治元(1185)年以来亘理(小堤)城主武石氏が領有する 相馬氏の説もあり(妙見堂の由緒書)	40 間×25 間 （山元町誌 名所・旧跡より）
		（山元町誌　大平歴史年表より）		

㊫：ものしり大学院、間：長さの単位　１間＝1.8m

一里一城と言われ、この２つは同時代の城かと考えていたが、残念ながら関連を裏付ける物証は見出せなかった。しかし、ここに至るまでの過程を楽しんだ探偵ごっこであった。

（若林）

吉田館跡

吉田館から海方向

大平館跡